蘭越

演劇

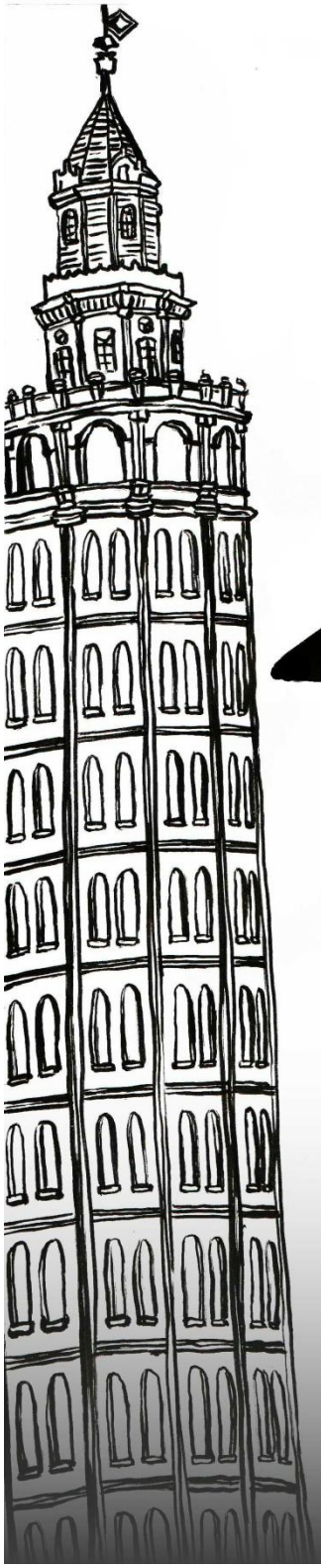
実験室

戯曲集 2009－2011

蘭越演劇実験室第一回公演上演台本

押し絵と旅する男

作・渡辺たけし



蘭越演劇ワークショップ発表会

押し絵と旅する男

時間　9月19日(土)6時半開始
場所　Kiichi103(蘭越駅前　旧室野商店倉庫)
料金　無料

原作　江戸川乱歩
脚本　渡辺たけし

青年
老人
兄
少年
カラクリ屋
押し絵の女

駅の待合い。
異国のもの悲しい童謡が、かすかに流れてくる。
老人が、風呂敷包みに、何かをつぶやいている。
青年は、それをみている。
老人が、押し絵を風呂敷に包む。
その刹那、青年とかすかに目が合う。
老人がほほえむ

老人　（手招きをする）
青年　これは
老人　おありなんでございましょ。興味が。
青年　ぶしつけに、ながめてしまい、失礼致しました。
老人　どちらまで。
青年　次に来る汽車で、東京へ帰るところです。
老人　ほう。

青年　魚津まで蜃気楼を見に行っておりました。
老人　蜃気楼ですか。
青年　酔狂な話です。
老人　いえいえ。
青年　海の向こうに見えるのです。真っ黒な塔のような、黒い固まりのような、渦のような、長い列車のような・・・つまりは、あれですが
老人　つまり
青年　大気と日光のプリズムが作り出す目の錯覚なのです。
老人　目の錯覚なのですか。
青年　まこと酔狂な話です。ところで、
老人　・・・分かっておりますよ。きになるのでございましょう。
青年　はあ・・・
老人あなたの目は、それこそ、そのプリズムのように、好奇心

で輝いておいでになる。

青年　よろしいのですか。

老人　近くで、ごらんください。

青年　（風呂敷包みの中を見る）押し絵。

老人　あなたはこれをごらんになりにくると、私には、さきほどから、ずうっとわかっておりました。

青年　歌っていました。

老人　こちらをお使いください。

青年　これは。

老人　プリズム望遠鏡にございます。（わたす）

青年　押し絵が歌っておりました。

老人　着物の歯切れで拵えた、ただの押し絵でございますよ。

青年、押し絵に見入る

老人、プリズム望遠鏡を渡す。

青年プリズム望遠鏡で、それをみる。
太い方を目に当てようとする。

老人　いけません！さかさでございます！
青年　あ・・・申し訳ありません。さかさでした。
老人　道理は、返してしまうと、取り返しがつかぬ場合もございます。
青年　青い目をしている。
老人　異国のお嬢様でございます。
青年　この白髪のご老人は
老人　異国の娘に恋をした、男でございます。
青年　まるで
老人　あなたさまは不思議相な顔をしておいでらっしゃいます。
青年　蒸し暑さで、私の頭がどうかとしてしまってのではないだろうか。

老人　あれらは生きておりました。
青年　確かに歌っておりました。
老人　（笑いながら）もしよろしければきいていただけますか。
　あれらの本当の身の上話を。
青年　身の上話とおっしゃいましたか。
老人　特にこの白髪の老人の身の上話を。
青年　はい
老人　まったくもって、それこそ、酔狂な話でございます。

テーマ音楽ＣＩ

老人　あれが、まだ二五才の頃の話でございます。

兄の影があらわれる。実態になる。
外出の身支度をしている。

弟が追いかけてくる。

少年　お兄様！

兄　出かけてくるよ。

少年　どちらまで。

兄　日が落ちるまでには戻る。

少年　心配しております。母上が。

兄　そうか。

少年　お兄様は、ここ数日、何も口にせず、布団でお休みになっているご様子もありません。

兄　僕なら大丈夫だ。

少年　まるで、肺病病みのようだと。父上も申しております。

兄　おまえにまで心配かけてすまない。時間がないんだ。

兄は出て行く。

少年　私は、その日、兄の背中をこっそり、おいかけることにしました。

兄は、東京の街を一心不乱に歩く。

少年　すると兄は、馬車鉄道に乗り込みました。わたしも、人力車に乗り込み兄の後を追いました。

浅草の曲

少年　そして兄がたどり着いた場所は、浅草「陵雲閣」十二階。

青年　見物客が東京を眺めるために拵えた、あの高い建物でございますね。

老人　あのころは、物見湯残が多く、「陵雲各」十二階は、大変

混み合っておりました。

兄、階段をどんどん登っていく。
少年もそれをおいかけて登っていく。
兄、階段の上から望遠鏡で何かを探している。

少年　お兄様！
兄　おまえ。
少年　何をしていらっしゃるのですか。
兄　おまえこそ。
少年　申し訳ございません。つい、
兄　僕を心配して、スパイよろしく跡をつけてきたというわけかい。
少年　何が見えるのです。
兄　ここが一番良いんだ。

少年　一番良い？
兄　秘密
少年　秘密
兄　秘密を１つ守れるかい。
少年　はい
兄　みかけたんだ。ここからこうやって浅草の街を眺めている
さなかに。
少年　何をですか
兄　一度だけ、青い瞳の娘を。
少年　娘・・・ですか。
兄　わたしは、その娘の瞳が忘れられず、今日もこうしてここ
にここにいる。
少年　それは、
兄　そう。それは、そういうことなんだ。これは、僕とおまえ
だけ秘密だ。約束できるね。

また、異国の歌が聞こえてくる。
少年も、遠くを見ながら人を探す。

少年　その青い目の娘は
兄　美しい青い服を来ていた。
少年　その青い目の娘は
兄　手に、赤い花を携えていた。

兄、望遠鏡から目を離す。
立ち上がり、動かなくなる。

少年　お兄様。大丈夫。必ず、みつかります。僕が、探して差し上げます。
兄　なぜだ。

少年　どの方角だったのですか。
兄　彼女は、なぜ、僕の前に姿をあらわさない。
少年　みつかります。だって。
兄　みつからない。
少年　だって、お兄様の運命の方なのでしょう。
兄　（苦笑）幼いのに、そのような大人びたことを
少年　お兄様！
兄　もう、戻ろう。
少年　その青い目の娘は
兄　美しい青い服を来ていた。
少年　その青い目の娘は
兄　手に、赤い花を携えていた。
少年　お兄様！あの、金比羅の向こう側に（望遠鏡を手渡す）
兄　（望遠鏡を覗く）
少年　お兄様

兄、一目さんにその方向へかける。

少年　お兄様。待ってください。その女性は！お兄様！

浅草の曲

兄、たどり着いたのは、覗きカラクリの見せ物屋

もう、しまっている様子。

兄、ドアをたたく。

ドアが開いて、カラクリ屋が出てくる

カラクリ　何、ようでございましょう

兄　すみません。

カラクリ　申し訳ございません。日暮れとともに、店じまいいたしたところでございます。

兄　あの・・・ここは

カラクリ　あらあら、そのような狐に疲れたようなお顔をされて

兄　人をさがしているのです。

カラクリ　ここには、私のほかに、人はございません。

兄　そんなはずはない。この中にいる。

再び、異国の歌がかすかに聞こえる。

カラクリ　とすれば、それこそ、異形どもにたぶらかされたか・・・

兄　それでもかまわない。

カラクリ　冗談でございますよ。異形、化け物の類は最近はやりませぬ。

兄　頼む、人目だけでも良いから。

カラクリ　ここは、浅草見せ物　覗きカラクリにございます。
中にいるのは命をもたぬ人形どものみでございます。
兄　頼む。中を

カラクリ屋、ドアをあけてやる。
中から、覗きからくりの機械がでてくる。

老人　その機械は、黒い箱の中央についた覗き穴から中を眺めると、箱の中の人形がみえるという、カラクリものでございます。
青年　私も、木戸銭を払って、子どもの頃覗いたことがあります。
老人　夕暮れの金比羅境内に、ぽつんと残る覗きからくり。
カラクリ　そこから、のぞきカラクリを、ごらんになって見てください。

兄、覗く。
のぞきからくり、姿をあらわす。異国の娘歌っている

カラクリ　流れ異国を　後にして
たどり着いたは　萱野村
播州浅野家　三平は
異国の娘に　悲恋の出会い
夫婦の夢に　泣かされる

不幸な三平　恋狂い
異国の娘と　添い遂げられぬ
大夫にさとされ　あきらめて
悔恨つのる　娘の胸は
世を恨みつつ　身を投げる

兄しばらくうごけない。

カラクリ　さて、おわかりになりましたね。中にいるのは押し絵の人形どもだけでございます。

からくり屋、退場

兄、まだうごけない。

少年、戻ってくる。兄の肩を叩く。

兄　この娘だ。

少年　お兄様。

兄　青い瞳。

娘　（ずっとお待ちしておりました。）

兄　私も、君をさがしていた。

娘　（ここへいらして下さい。）
兄　すぐにいく。
少年　お兄様
兄　秘密を、もう１つ守れるかい。
少年　はい
兄　それを、僕に貸してくれ。
娘　（ここへいらして下さい）

少年、望遠鏡を逆さに向ける
兄、それをさかさに、のぞく
娘の歌が、はっきりと聞こえてくる。
テーマ音楽ｉｎ

兄　（ゆっくり振り向く）いいかい。誰にも、秘密だよ。

兄、押し絵の中にゆっくり消えていく。
少年たちつくす。
そこへ、からくり屋が戻ってくる。

からくり　どうしました。坊ちゃん。
少年　あ・・・すみません。
からくり　結構でございますよ。気になされないでください。
しかし、そろそろ夜の風も冷たくなって参りました。お母様が心配されますよ。おうちに戻られては。
少年　すみません。
からくり　どうなさいました。
少年　からくりを
からくり　からくりをですか。
少年　見せてください。
からくり　もう、日暮れと共に店じまいしてしまいました。

少年　見せてください。からくりを。
からくり　はいはい。では、約束を１つできますか。
少年　・・・はい。
からくり　ほかのお客様には内緒ですよ。
少年　はい

ふたたび、のぞきからくりをのぞく。
押し絵があらわれる。娘と兄の姿。

からくり　いかがです。このカラクリ窓からのぞくと、箱の中にある押し絵が浮き出る仕掛けなんです。お坊ちゃん、初めてですか。こういうのをごらんになるのは。
少年　はい。
からくり　お坊ちゃん、お嬢ちゃん達は、皆さんたいへん驚かれます。しかし、ただのプリズムが起こす目の錯覚なんです

よ。

少年　ひとり増えています。

からくり　増えている？

少年　増えています。

からくり　どれどれ。

少年の方を、からくり、ゆっくり振り返り微笑む。

からくり　押し絵の人形が増えるなんてことはございません。異形、化け物の類は最近はやりませぬ。少し、お寒うなって参りました。そろそろおうちに帰られた方が良いかと思います。

少年　は・・・はい。

からくり　いそがないと、本当に化け物どもの時刻になりますよ。

少年とりのこされる。
音楽

少年　兄の姿はその後ふっつりと消えてしまったのですが、大人達は家出だの、なんだのと見当違いの推量をしていました。

老人　私は母にお金をねだって、とうとうその覗きカラクリの押し絵を手に入れました。

少年　父の商売の関係もあり、その後すぐに富山の山奥に引っ込みました。

老人　そして、私は、三十年ぶりに、上京することになり、久々に変わった東京を兄たちにも見せてあげたいと思いましてね。

老人、自分の手元の押し絵を眺める。

青年　私にも聞こえます。

老人　とんだ長話をしてしまいました。しかし、あなたは分かってくださいましたでしょうね。他の皆様のように、私のことをキチガイだとはおっしゃりませんでしょう。どれ、兄さん達もくたびれたことでしょう。（風呂敷につつもうとする）

青年　あの。お兄さんは。

老人　そうなんでございます。

青年　お兄さんだけが、お年をとられている。

老人　そりゃそうでございます。異国の娘はもともと、こしらえられた押し絵。兄は生きた人間なのでございますか。

青年、押し絵にそっと触れようとする。

異国の歌が聞こえ、手を引っ込める。

青年　これは・・・失礼。

老人　２人ともちょっと、恥ずかしがっているのでございます。

老人、押し絵を担いで立ち上がる。

老人　では、お先に。私はこの村の親戚の所へ一晩泊まります。

青年　それでは。

老人　夜の帷も落ちて参りました。少し、お寒うなって参りました。お気を付け下さい。もうすぐ化け物どもの時刻です。

遠くから、汽車の霧笛

青年、立ちつくす

テーマ音楽ｉｎ

―幕―

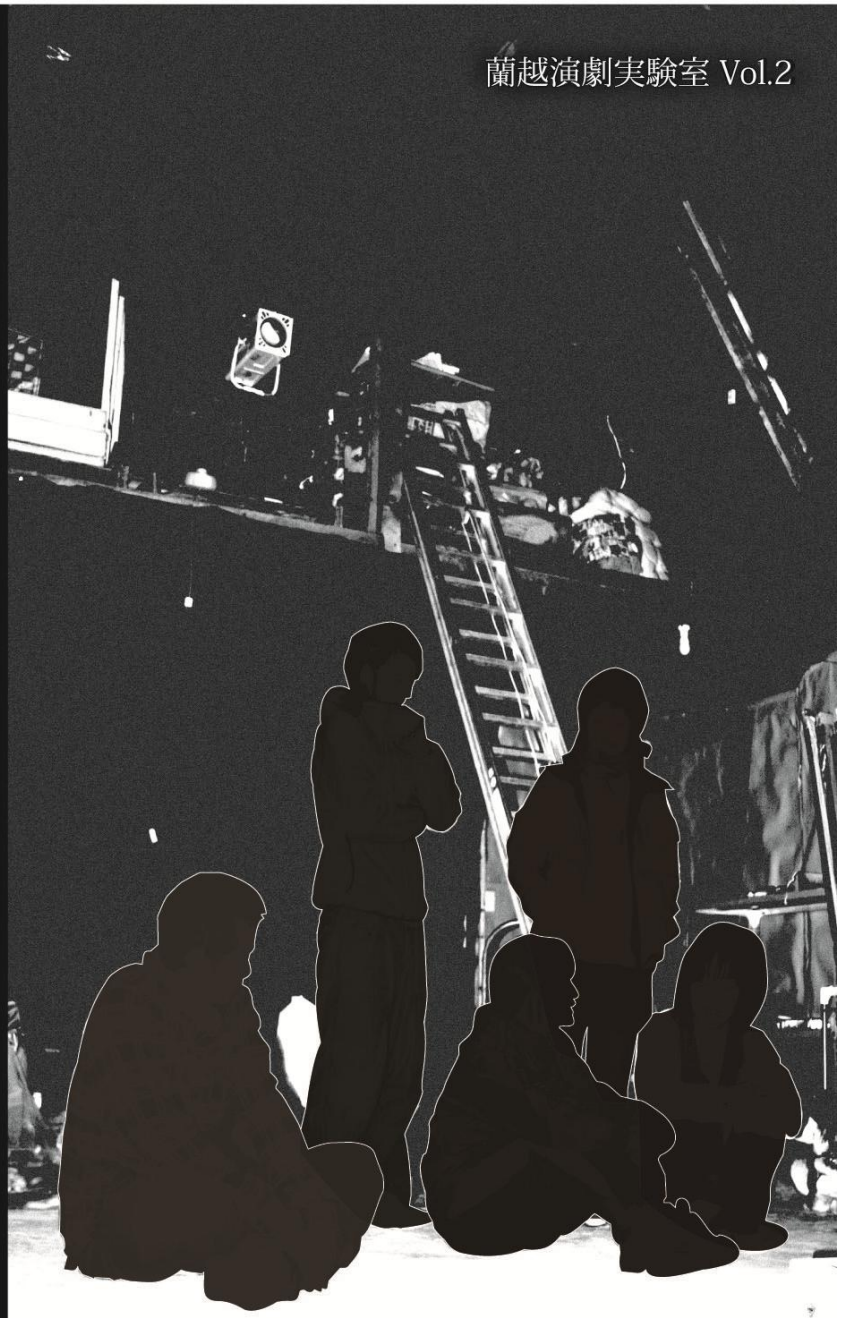
蘭越演劇実験室第二回公演上演台本

しゅうまつのよてい

作・渡辺たけし

しゅうまつのよてい

蘭越演劇実験室 Vol.2



作・演出　渡辺たけし
日時　2009年12月13日　18時30分
場所　木工房カフェ「yunocafe」
　　(北海道磯谷郡蘭越町字湯里131 湯ノ里デスク内)
料金　無料　カンパ歓迎

男 灰 白 黄 赤 青
谷 山 島 井 田

男はぐったりしている。腹部に血痕がみてとれる。
男は、手足を縛られ、イスにくくられている。
その横では、若者達が数人でＵＮＯをしている。

青田　なんていうのかな。神経質っていうのかさ。
赤井　あー。わかる。わかる。そんな感じですよね。
青田　ほんと、俺、ああいう人ほんと苦手。もーいーやってかんじだよね。
黄島　スキップ。
赤井　あ、そうそう。あの。こないだもあれなんですよ。ほんのちょっと、わたしが休憩時間すぎてタバコすってたら、すごいんですよ。白山マネージャーやってきちゃって
青田　あぁ、それやばいね。
赤井　だから、私謝ったんです。すぐに。わるいと思って。こっちあれですよ。あやまったんですよ。それなのに。

青田　おこるでしょ。そうなんだよ。なんていうかさ。まぁ、こっちが悪いのわかるんだけどさ。そうなんだよ。あれなんだよ。

黄島　リバース。

赤井　あれ、どうにかして欲しいです。ほんと。

青田　なんかさ。あんましさ、人の情っていうか、そういうの薄いよね。

黄島　あ、赤井さんですよ。

赤井　あれ、私でした。はい。ＵＮＯ。

青田　あ、それからさ。こないだもさ。白山マネージャーさ、ちょっと遅れてきたことあったでしょ。なんか、朝、出がけに本社から緊急の電話あったとかいってたけどさ。

赤井　あ、ありましたね。

黄島　あ、ドロートゥーね。

青田　あ、またですか。

黄島　だって。
青田　あれさ、絶対嘘だとおもうんだよ。俺の読みでは、絶対、前の日飲み過ぎて寝坊だね。ちゃんと、言えばいいのにね。
赤井　そう。そうですよ。絶対。あ、あの。あがりです。
青田　あ、まじですか。
赤井　はーい。これ、そう取りです。
青田　さっきから、ずっとだよ。赤井さんばっかり。
赤井　はぁ。なんか、ですね。
黄島　あのね。赤井さん。赤井さんって、札幌だっけ。
赤井　生まれですか。
黄島　うん。
青田　札幌だよね。
赤井　はい。
黄島　あぁ、いいんだ。札幌って、ありなんだぁ。そうかぁ。
赤井　はい？

黄島　札幌って、ドローフォーであがっていいんですねぇ。
赤井　あれ、だめでしたっけ。
黄島　あの、UNOって結構、地方ルールあるとおもうんですよね。
青田　そういうのあるんですか。
黄島　いや、私の地方はですね、絵柄のカードとかだと、あがれないルールだったんだよね。だから、私てっきりさぁ。
赤井　あ、そうですか。ねぇ。
青田　あ、はぁ。
黄島　あ、でもいいの。いろいろ地方ルールあるから。
赤井　あ、そうですか。じゃぁ、あの、これ、上がりなしにして続けますか。
黄島　いや、いいの。ここは、ほら。あれ、青井君って、札幌。
青田　いえ、あの、神奈川ですけど。

黄島　あ、そうだよね。こないだ、そんな話ししたもんね。私、三重なんですけど。あ、三重って、あんまり、なにあるのって聞かれると説明できないんですけど。三重っていうか、私の住んでいたところはですね、あがれないんです。神奈川もいいんだ。ドローフォーあがり。

青田　いや、別に、そういうのは、あんまりきにしたことないですけど。あ、じゃぁ、ちょっと今のなかったことにしますか。

赤井　あ、私も、どっちでも。

黄島　あ、別にいいんですよ。大事ですから。大事だとおもうんですよね。その土地のルール。

赤井　いや。別に、いいですよ。今のなしで。全然。

黄島　でもね。それだと、赤井さんに悪いと思うんですよ。

青田　じゃあ、今回はドローフォーでもあがりはありでですね。次回から、あがりはなしってことで。ね。

赤井　あ、私、どっちでも。
黄島　あれ、だから、赤井さん、本当は納得してないんでしょ。ちゃんと納得してやったほうがいいと思うんですよね。私、こういうことも。
赤井　だから、どっちでもいいんです。
青田　あのさぁ。あのですね。次いきましょう。次。あ、それからさ、赤井さん。あれ、ほら、こないださ。白山マネージャーさ。本社からっぽい電話きて、なんだか、謝ってたじゃない。ほら、先週。（ＵＮＯをまた、配り始める。また、ゲーム開始）
赤井　あー。やってましたね。
黄島　でね、これ、次のはドローフォーあがりなしってことね。
青田　え、そうですよね。
赤井　どっちでもいいです。
黄島　じゃぁ、黒いカードは。

青田　あれ、何、あやまってたんだろうね。
黄島　ワイルド。
赤井　私、あの人、結構やらかしてると思うんですよ。
青田　そう、絶対、やらかしてるよね。
黄島　ワイルドは、どうするの。
赤井　どっちでもいいです。
青田　なんかさ、絶対、あの人、俺たちの知らないところでやらかしてるとおもうんだよね。
赤井　ねぇ。
黄島　ワイルド！
青田　だいぶ、本社の評判悪いみたいだしね！
黄島　ワイルド！
赤井　絶対、よくないですよ！

気がつくと、後ろに白山がいる。

両手は、たくさんの食料でふさがっている。
肩には、銃。

白山　そうね。良くないみたいね。
黄島　ワイルド。
青田　あ
赤井　あれ。マネージャー。
白山　いや、まいったわ。ほんと。大変、これとってくるの。
黄島　あの、白山マネージャーききたいんですけど。白山さんって、小樽出身ですよね。ドローフォーってあがれます。
白山　あんたたちみたいなね、いい従業員ばかりあいてにしてるからさ、ホント、私の評判さがるんだよね。ずんずん下がるのさ。ね。
赤井　続きやりますか。
青田　あ、黄島さん。

黄島　でも、そういうのちゃんと、しときたいの。
白山　楽しそうですね。誰かのわるぐちいいながら、UNOですか。こっちは、死と隣り合わせで、食料とりにいってきたのにね。
青田　配るよ。
赤井　はーい。
白山　で、どういうの。これ。
青田　だから、白山さんの話ししてたわけじゃないですよ。
白山　違うよ。この人。
青田　ジャンケン。
黄島　で、今回は、ドローフォーあがりは。
赤井　どっちでもいい。
白山　この人、どうしたのって聞いてる。
青田　まだ、大丈夫みたいですから。
赤井　さっき、噛まれたばっかりみたいですから。

黄島　白山さんも一緒にしませんか。
白山　いい。ちゃんと説明して。
青田　あっちの橋んとこに、倒れてたんです。
赤井　あの、青田さん。海好きですか。

白山、ぐったりしている男をゆするが起きない。

白山　捨ててきて。
青田　そう言うわけにはいかないでしょ。
赤井　こういうの終わったら、青田さん、海いきたいですねぇ。
白山　いつ終わるの、こういうの。だめでしょ。これ、まずいのわかるよね。
青田　こっちまわりね。
黄島　白山さんとこって、ワイルドはあがれるんですか。
白山　どっちでもいい。

黄島　小樽って、どっちでもいいんだ。
赤井　あれですか。神奈川って海水浴場あるんですか。
青田　あるよ。
赤井　なんか、いいですよね。湘南とか、そういうのですよね。
青田　２
白山　この人も外にいるやつらみたいに、なったら、あんたたちちゃんと始末できるんだよね。
青田　でもさ、血流して倒れてるのに、だまってるわけにはいかないですよね。
黄島　リバース。
赤井　私、結構、水の中とか大丈夫なんです。青田さんって、うまそうですよね。
青田　だめ。おれ、泳げないし。
白山　そうだよね。ぜんぜん、泳げないもんね。
黄島　リバース。

赤井　うそ。泳げないなんて。ぜんぜん、大丈夫そう。
青田　だめなんだよ。
白山　そう、だめなのこの人、ぜんぜんおよげないの。
赤井　私、教えてあげますから。
黄島　ドローフォー。

男、もぞもぞと動き出す。泣いている。
噛まれた部分がいたいらしい。

白山　だから・・・。
青田　どうだったんですか。
白山　なにが。
青田　そと。
白山　そとのなに。
青田　そとは、そとでしょ。

白山　いっぱい。
青田　やっぱり。
白山　あいつらばっかり。生きてる人間なんて、もういないよ。
赤井　私、教えてあげますから。泳ぎ。
白山　もう、泳がないよ。私達。たぶん。
赤井　私、得意ですから。泳ぎ。小学生の頃から。スイミング
　スクール。ずっと、得意ですから。スイミングスクール。
黄島　あの。
青田　え、はい。
黄島カード。４枚取ってください。

　ドアをノックする音。

白山　大丈夫。鍵しめてあるから。
青田　でも、これ。

白山　外には、死んでるヤツしかいないんだよ。死んでるヤツしか、あるいてないの。

青田　いや、それは、あれなんだけど。まだ、どっかに俺たちみたいに生きてる人間がいて、そういうことあるかもしれないじゃないですか。

ドアのノックの音、さらに大きくなる。

赤井、はしっていって、ドアをあける。

ドアから灰谷入って来る。

灰谷　あ、あの。すみません。

皆、黙っている。UNOをづけている。

灰谷　あのですね。あの、ここなんですけどね。

白山　あ、とりあえず。
灰谷　あの（イスの男を指さす）、彼なんですけどね。
白山　知り合い？
灰谷　あ、同僚なんです。あの、橋の向こうのスタンドにですね。
白山　そう。
灰谷　そこに、彼の車あったもんですから。たぶんですね。こかもと思ってですね。そしたら、皆さんがですね。あの、皆さん。
赤井　あの、ここ、安全ですから。結構。
青田　なんか、ここ、まだ、あいつらにみつかってないみたいです。
白山　時間の問題だけどね。きっと。
灰谷　いいでしょうか。
白山　なに？

灰谷　あの、お仲間にいれてもらっていただいても。
黄島　いいですよ。でも、先に確認しておきたいんですけど。
　あなたの町はドローフォーあがりありですか。なしですか。
灰谷　はい？
赤井　黄島さん、たぶん、ちがいますよ。
灰谷　どこいっても、ほかの住民、みんな、あんなふうになっちゃってたんです。ですから、ここ、いさせてもらっていいですか、というようにですね。
白山　どっちでも。お好きなように。
灰谷　あ、ありがとうございます。
青田　あ、いいと思いますよ。もう、あんまり、どうせ、生きてる人間いないし。
黄島　やりますか。一緒に。あの、これUNOっていうんですけど。
灰谷　あ、はい。

白山　しりあいなんだよね。
灰谷　あ、はい。同僚なんですよね。橋の向こうのガソリンスタンドで一緒に働いてますっていうか、ましたっていうか。
　あの、昨日まで。はい。
白山　噛まれちゃったみたいなんですよね。
灰谷　え。といいますと。
白山　噛まれちゃったみたいですよ。
灰谷　というと、やっぱり、あいつらに。
白山　あいつ等以外に、誰にかまれるんですか。
灰谷　あいつらに・・・あのですね、なんて呼んでますか。
白山　え？
灰谷　あのですね。あいつらのことなんですけど。
白山　別に。
灰谷　なんて呼ぶルールなんですか。ここはでは。
赤井　やっぱり。

青田　ゾンビ。
白山　ルールっつうか。
灰谷　あのですね。もともと、ゾンビって、サモア諸島のですね、呪術でよみがえった魂のことをですね、いうらしいんですよ。ゾンビっていう呼び名はですね、８０年代の映画の影響らしいんですよね。あれは、映画会社が勝手につけた呼び名でですね。だから、この場合はですね。その名称はですね、あまりよろしくないんじゃ・・・
白山　あの。
灰谷　はい。
白山　なんでもいいんじゃないですか。
灰谷　あ、はい。
青田　あの、結構前にかまれちゃってて。
白山　あの、お願いなんですけど。
灰谷　はい。

白山　処分っていうか、どうにかしてもらえますか。
青田　白山さん。
白山　え。なに。
青田　だって。
白山　え。なに。
青田　だって。
白山　え。なに。
赤井　青田さん。
黄島　青田君の番だよ。
青田　ちょっと待って。
黄島　はーい。
青田　まだ。生きてるわけでしょ。処分とかさぁ。
白山　もうだめでしょ。
青田　わかんないでしょ。
白山　みんなだめでしょ。

青田　そうだけどね。
白山　そうでしょ。
青田　そうだけどさ。
白山　じゃ、どうするの。
青田　そうだけどさ。
白山　どうすんの。
青田　でもさ。
灰谷　ちょっとですね。あのですね。

灰谷、男のそばによる。

灰谷　あの、大黒さん。あの、大黒さん。・・・あ、だめみたいですね。
青田　え。
白山　ほら。

青田　ほらっていうか。
赤井　あのですね。ちょっと、どうかとおもうんです。
白山　なにが。
赤井　なにがっていうか。
灰谷　あの、大黒さん。あの、大黒さん・・・やっぱりだめだ。
　だめみたいです。
青田　あなたも、だめっていうかさ。
黄島　あの、青田君の番ですけど。
青田　もう、黄島さん。
灰谷　いや、どうしましょう。大黒さん。
白山　じゃあさ、とりあえず、わかったわ。あのね、私、ここ
　出るから。あと、頼むね。
青田　白山さん。
白山　だって、放っておいたら、この人、大村さん。
灰谷　大黒さん。

白山　大黒さん。まずいでしょ。噛まれてんだよ。死んだら、あれになるんでしょ。ゾンビ。
灰谷　ここでは、そう呼ぶルールになったんですね。
青田　ルールとかないから。
白山　ガソリン、まだ、あったよね。ワゴン。
黄島　ＵＮＯ終わりですか。
青田　僕ら、どうするの。
白山　僕ら、どうするの。
青田　白山さん。
白山　僕らは、すきにしたら。行くか行かないかは、僕らできめて。
赤井　どこに行くんですか。
白山　どうしよう。
青田　どこいっても、もう、生きてる人間いないですよ。
白山　札幌とかいけば、まだ、いるかもよ。

青田　もたないですよ。ガソリン。
白山　でもさ、ここいてもさ。・・・なに黒さん？
灰谷　大黒まさき君です。
白山　大黒さん、たぶん、あばれだすでしょ。もうすぐ。
赤井　でも、放っておくのも、なんいうか、人間っていうか、
　人間としてどうかとおもうんです。
白山　いつまでを人間と呼ぶかは、難しいけどね。私、行くよ。
灰谷　あの、僕も行きます。
青田　ちょっと。
黄島　あの。皆さん、どこかいくんですか。
青田　聞いててよ。話。
黄島　だいたい聞いてましたけど。
白山　どうすんの。青田君は。
青田　なに、それ。
白山　私は、いくけど。青田君は。

青田　え、それはさ。
白山　どっちでもいいけど。青田君は。
青田　ずるくない。
白山　一緒にいくの。いかないの。青田君は。
灰谷　私は、いきますけど。
青田　でもさぁ。
赤井　あの、私、青田さんと残ります。
青田　え。あ、そう？
白山　あ、そう。残るんだ。
青田　いや。だからさ。
赤井　白山マネージャーは、自分で思うようにやったらいいとおもうんですよね。あなたは、そういうふうな感じで、人の尊厳とかそういうこと、踏みにじるみたいな感じだと思うんですけど、わたし、そういうのだめですから。ゆるせないっていうか。ねぇ、青田さん。

青田　うん。
白山　そうだね。尊厳とかね。踏みにじるわ。だよね。踏みにじるわ。
青田　うん。
白山　いいんだよね。
青田　・・・
赤井　青田さん？
黄島　で、結局、皆さん、どうすることにしました。続けます？
UNO。
灰谷　とりあえず、いったん、やめるみたいですよ。
黄島　えー。私、あと、二枚だったのに。
白山　じゃ。
灰谷　あの、お世話になりました。大黒さんにも、お世話になりました。
白山　本当にいいんだよね。まあちゃん。

青田　だからさ。
白山　いっちゃうよ。
赤井　あれ。
白山　なに。
赤井　まぁちゃん、っってました。
白山　言ってないよ。いくよ。まぁちやん。
青田　あのね。赤井さん。
赤井　はい。
青田　あのね、赤井さん。
赤井　はい。
青田　あのね。あのさ。行くよ。
赤井　え。
白山　はやく。

白山、青田の手をひいて行ってしまう。

青田　ごめんね。赤井さん。
赤井　え。あ。はい。
灰谷　大変、お世話になりました。

灰谷も行ってしまう。

赤井　それ。そういうことかよ。
黄島　あのね。
赤井　それ。そういうことかよ。
黄島　赤井さん。
赤井　それ。そういうことかよ。
黄島　あのね。赤井さん。やる？ＵＮＯ。２人だけど。
赤井　あほか。

黄島　２人じゃないか。あのひといれたら、何人？２．５人くらい。
赤井　あほか。
黄島　やる？ＵＮＯ？２．５人で。
赤井　やらない。

黄島、男のそばによる。
男、静かに立ち上がる。

黄島　あ。あの、おたくの地方ルール、ドローフォーあがりは、あり？なし？

男、顔をあげる。
音楽、ＣＩ

―幕―

蘭越演劇実験室第三回公演上演台本

ぞうもつとあくま

作・渡辺たけし

蘭越演劇実験室第三回公演

花つうもとあくま

タドコロ
ヨシモト
エヒメ
店長
男

第一話「恋と臓物」

明かりが付く。

店長　ここは、カフェミツモト。都会から少し離れた場所にある隠れ家のような喫茶店。ここで働く、ごく普通の男女。でもただひとつ違っていたのは、ここの従業員たちは魔法使いの見習いだったのです。これから始まるお話は、カフェミツモト　自然処置療法研究室で起こるある日の出来事。第一話。「恋と臓物」

店内。

「カフェミツモト　自然処置療法研究室　開店一周年記念」という垂れ幕

エヒメ、ヨシモトが厨房で何かを作っている。

液体状のものを作っている。
そこへ、店長やってくる。

店長　あ、そうです。そうです。えーとねぇ。そっからがちょっと難しいんですよね。あ、そう、それ。わかります？それです。そこの温泉のとこ曲がると、大きなですね、橋がですね。あ、見えました？え、通りました？ってことは、えーと行き過ぎたかもしれないですね。じゃあ、ちょっと戻ってもらいっていいですか。はい。そう、もとの温泉のとこまで、いいですか。はい。はい。そう。温泉まで。で、僕そこまで迎えに行きますから。ね。はいはい。

会話の最中にタドコロ帰ってくる。
次も会話の最中。

タドコロ　あの、エヒメさん。あれですよね。これでいいんですよね。
エヒメ　あ、あった。
タドコロ　あの、これしか。
エヒメ　うん、それ。
タドコロ　一応、お店の人には、あれです。しわにならないタイプって。そしたら、これって。
エヒメ　うん。
ヨシモト　（エヒメに）あと、これ（ビニール袋に入った臓物を持ってくる）
タドコロ　なにしてんですか
エヒメ　うん。まぁ。最後、これね。
タドコロ　え
ヨシモト　混ぜて、おしまいね。ちゃんとしたほうがいいよね。
エヒメ　だよね。

二人とも、白衣を着て、手袋をしてマスクとゴーグルをかける。
二人、その臓物をミキサーにかける。
店長その間も会話を続けている。
できあがると二人は、手を組んで、呪文を唱える。

店長　あ、だからね。そうそう、戻ってもらっていいですか。
あ、大丈夫。はいはい。コンビニね。そう、コンビニね。いや、違う、違う。コンビニじゃなくて、温泉を通り越して、そのまま５００ｍくらい。（ヨシモトへ）５００ｍくらいだよね。
ヨシモト　え。
店長　温泉から橋まで
ヨシモト　６００ｍいや、６５０ｍくらいだよね。
エヒメ　かなぁ。それくらいかなぁ。

店長　そうそう・・・そうみたいです。はい・・・。
エヒメ　・・・あのね、タドコロ君。
タドコロ　はい。
店長　あ、あぁ、そうそう。まっすぐいくとですね。そうですね。５００ｍくらい。
ヨシモト　６５０ｍくらい。（タドコロに）それでね・・・
店長　そうそう。そうです。温泉まで戻ってそこから橋までがですね。
エヒメ　あのね、タドコロ君さ。喉かわくでしょ。
タドコロ　え、いや。はぁ。
エヒメ　これ。
店長　６００・・・
ヨシモト　６５０ｍくらい。
店長　・・・５０ｍくらいで。そこにいて下さい。そう、橋の所に。

ヨシモト　飲んで。
タドコロ　は、はい。

タドコロ液体を飲む。
エヒメ急いで、退場。

ヨシモト　どう。
タドコロ　どうって。どういうのですか。
店長　いや、結構大きめの看板なんですけどね。書いてありますから。大きく。木の板に。はい・・・はい・・・そうそう。
ヨシモト　なんも変わりない。
タドコロ　えー。なんにもないですよ。あ、そういえば、店長。
ヨシモト　だめ。
タドコロ　え。
ヨシモト　私だけをみて。

店長　「カフェミツモト　自然処置療法研究室」って。はいはい。そうそう。ミツモト・・・あれ、こないだ、メールで送りましたよね。

タドコロ　あの。店長。

店長　そういうんじゃなくて、ちゃんとした魔術を・・・はい。そう、魔術。違う、占いじゃなくててせすね。そういう、嘘っぽいのじゃなくて、魔術。魔術。はい。・・・・は？ぜんぜん、あやしくない。宗教法人じゃくて。・・・橋にいて下さい。今、迎えに行きますから。はい。よろしく。

ヨシモト　だめ。私だけをみて。店長今、電話中だから。

店長　電話終わったよ。

タドコロ　終わったって。

ヨシモト　今は、私だけを見て。店長忙しいはずだから。

店長　そうでもないけど。

ヨシモト　忙しいから。だめだから。店長だめだから。今、タドコロ君がみなくちゃいけないのは、私。そっちみない！
店長　えーと。

エヒメが入ってくる。

ヨシモト　エヒメさんも、まだ、こない！
エヒメ　はい、はい（隠れる）。
タドコロ　でも。あの、エヒメさん。
ヨシモト　そして、君は、私だけを見る。
店長　ちょっと、今晩演奏するバンドの人迎えにいってくるね。
ヨシモト　はい。いってらっしゃい。
タドコロ　あの、店長。

店長、こそこそといなくなる。

タドコロ仕方なく、ヨシモトを見る。

間

タドコロ　あの。

ヨシモト　なに。

タドコロ　いいですか。

ヨシモト　なに。

タドコロ　あの。見るのやめて。

ヨシモト　え。

間

タドコロ　これ、どうかなって。

ヨシモト　なに。

タドコロ　ずっと、こうしているのって。

ヨシモト　だめ。
タドコロ　いや。その。
エヒメ　ヨシモトさん。
ヨシモト　エヒメさんも。大事なところだから。
エヒメ　うん。はい。
タドコロ　何してるんですか。これ。ねぇ、エヒメさん。
エヒメ　うん。まぁ。とりあえず、耐えてくれるかなぁ。大変だけど。
タドコロ　なんか、つらくなってきたんですけど。
ヨシモト　なんか、かわることない。
タドコロ　別に。
ヨシモト　あれ飲んだよね。
タドコロ　はい。
ヨシモト　こう。気分というか。気持ちの変化というか。
エヒメ　タドコロ君の、ヨシモトさんに対する気持ちというか。

ヨシモト　みなまで、言わないで。
タドコロ　特に。
ヨシモト　はっきり言わないで。傷つくから。
タドコロ　はい。

エヒメの手を引き、液体をもって、厨房へ。
なにか、本のページを見ている。

ヨシモト　失敗みたい。
エヒメ　そうだねぇ。
ヨシモト　なんだろ。
タドコロ　なんですか。
ヨシモト　なんでもない。なんでもない。
タドコロ　なんでもないって。
ヨシモト　ホント、なんでもないから。

タドコロ　あの。ヨシモトさん。
ヨシモト　なに。
タドコロ　魔術のマニュアル。
ヨシモト　うん。
タドコロ　しかも、薬。
エヒメ　ね。
タドコロ　さっき飲んだの、なんの薬ですか。
ヨシモト　え。うん。
タドコロ　エヒメさん。
エヒメ　あのね。
ヨシモト　さっきの薬はね。薬。元気になるやつ。ほら、最近、仕事忙しくて、タドコロ君さ、ちょっと疲れてるみたいだから。
タドコロ　あの。

ヨシモト　なんでもないよ。来週から、店に出す薬をね。ちょっと、タドコロ君で試させてもらっただけだから。そういうこと。ね。
エヒメ　うん。
タドコロ　エヒメさん。

タドコロ、ヨシモトの持っている本を奪い取る。

ヨシモト　タドコロ君。
タドコロ　あの。
ヨシモト　あのね。だからさ。
タドコロ　エヒメさん。
エヒメ　はい。
ヨシモト　違うの。エヒメさんは、違うの。エヒメさんは、悪くなくって。私が無理矢理。

エヒメ　うん。そうそう。私は無理矢理ね。
ヨシモト　裏切りかよ。
エヒメ　だって、ヨシモトさんがさぁ。
ヨシモト　だって、最初はエヒメさんが。
エヒメ　それは、ヨシモトさんのタドコロ君に対する思いをね。
ヨシモト　それは、いわないでって。

振り向くと、タドコロ君が倒れている。

エヒメ　あれ。
ヨシモト　あれ。
エヒメ　タドコロ君。
ヨシモト　タドコロ君。
エヒメ　（揺さぶりながら）タドコロ君。タドコロ君
ヨシモト　（揺さぶりながら）タドコロ君。タドコロ君。

エヒメ　（揺さぶりながら）タドコロ君。タドコロ君。タドコロ君。

ヨシモト　（揺さぶりながら）タドコロ君。タドコロ君。タドコロ君。

エヒメ　（脈をとって、胸に耳を当てる）あれぇ。

ヨシモト　触りすぎ。（引き離そうとする）

エヒメ　だって。でも・・・なんか・・・・

ヨシモト　ちょっと。

エヒメ　止まってるみたい。

ヨシモト　なにが。

エヒメ　だから。

ヨシモト　タドコロ君。タドコロ君。

エヒメ　心臓。

ヨシモト　タドコロ君！

エヒメ　タドコロ君！！

ヨシモト　タドコロ君！！！
エヒメ　タドコロ君！！！！
ヨシモト　エヒメさん。
エヒメ　なに。
ヨシモト　押さえて。
エヒメ　はい。
ヨシモト　あたしより大きな声出さないで。
エヒメ　え。
ヨシモト　ごめん。動転してる。なんでもない。やっぱり、あの薬のせいかなあ。
エヒメ　（本をみて）まって。まって。（本を読む）愛情が芽生えるための魔術の薬。材料・・・①黒羊の臓物　②山犬のツメ　③カマキリの黒焼きの粉末　④月桂樹の葉の粉末　⑤ナンテンの実の粉末・・・書いてある通りに調合したよね。

ヨシモト　うん。したよね。で、あとは、見つめ合えば愛が芽生える。
エヒメ　芽生えると。ナンテンもカマキリもね。山犬のツメ・・・
ヨシモト　ツメも新しいのを問屋からおろしたし・・・
エヒメ　黒羊の臓物
ヨシモト　ちゃんと・・・ほら。（入っていた袋）
エヒメ　そうだよね。
ヨシモト　あれ。またかなあ。
エヒメ　失敗したもんね。前回も、悪魔よびだしてさ。
ヨシモト　死ぬ？
エヒメ　死なない。
ヨシモト　死ぬ？
エヒメ　でも、あれじゃない。悪魔はこなくてよかったよね。
あれは失敗して正解。

ヨシモト　やっぱり、相性わるいのかな。それか、風水。風水いまいちだから、死ぬ？

エヒメ　普通そう簡単に死なないから。（入ってた袋みながら）あれ。ねぇ、ヨシモトさん。

ヨシモト　なに！

エヒメ　黒羊の臓物。

ヨシモト　え！

エヒメ　黒山羊

ヨシモト　ヤギ！？

エヒメ　山に羊でヤギ。

ヨシモト　え。あぁ。ヤギ。え、なになに。ヤギ。これヤマヒツジじゃないの？

エヒメ　山に羊でヤギなの。

ヨシモト　えー。マジ？マジ？・・・これ、羊じゃないの？山に羊でヤギって読むの？なに、私、羊だと思って、山羊の内臓！

エヒメ　そうだね。

ヨシモト　あー。そう。だから。でもね。あのね。

エヒメ　店長、携帯。

ヨシモト　でもね、エヒメさん。あれだよね。羊って、山羊の仲間だよね。

エヒメ　え。

ヨシモト　羊と山羊もメーだよね。

エヒメ　羊がメーじゃない。

ヨシモト　まって、メーメー子ヤギって感じじゃない。

エヒメ　そうか。山羊がメーか。

ヨシモト　あれ、ハイジが飼ってるのは。

エヒメ　待って。待って。ハイジは飼ってないんじゃない。ハイジの彼氏のペーターじゃない。
ヨシモト　あれ、ペーターは羊飼いだよね。
エヒメ　じゃぁ、メーとなくのは、羊？ハイジが飼ってたのは？
ヨシモト　ヨーゼフ。（つぶやく）山羊？
エヒメ　ヨーゼフはおじいさんの飼ってた犬じゃない？
ヨシモト　あれ、だから、羊と山羊は同じだよね。
エヒメ　違うかな。
ヨシモト　山羊なの、これ！
エヒメ　おそらくね。
ヨシモト　山羊なの。この臓物、山羊なの！ちょっと、まずいじゃない。黒羊の臓物なのに、この臓物、黒山羊なのは、ちょっとまずいでしょ。黒山羊って・・・なんで・・・
エヒメ　最後、ヨビヨセの呪文もやっちゃったしね。電話しよう。店長。

ヨシモト　でも、羊と山羊は同じ生き物だよね。
エヒメ　ヨシモトさん。
ヨシモト　わかってる。わかってる。落ち着け。落ち着け。自分、落ち着け。
エヒメ　店長、電話しようか。
ヨシモト　うん。でもね、これね。もう一回聞いていい。羊と山羊は違う生物だよね。
エヒメ　ヨシモトさん。
ヨシモト　寂しいね。現実って。
エヒメ　電話するね。
ヨシモト　待って。まって。
エヒメ　待つ？
ヨシモト　死んでるよね。
エヒメ　死んでないよ。たぶん。

ヨシモト　死んでないよね。そうだよね。じゃぁ、電話しなくていいよね。
エヒメ　えーと。でもね。死んでるかもしれないし。
ヨシモト　でも、エヒメさん、さっき、死んでないっていったよね。
エヒメ　そうだね。言ったね。
ヨシモト　ちょっと、もう一回確かめようか。
エヒメ　そうだね。そうだね。（タドコロによる）
ヨシモト　待って。待って。私がやるかな。
エヒメ　え。うん。いいよ。いいよ。
ヨシモト　（タドコロの心臓に耳を当てる）うん。
エヒメ　どう。
ヨシモト　動いてない。
エヒメ　したほうがいいかな。人工呼吸。
ヨシモト　えー。だめだめ。

エヒメ　そうだよね。
ヨシモト　まだ、そういうことしたことないから。
エヒメ　そういう話じゃなくて。
ヨシモト　こういう形で、最初はいやだな。
エヒメ　あ、あぁ。そういうのね。ああ、ああいうやつね。
ヨシモト　なに言ってるかな。エヒメさん。今ね、そういう状況じゃないよね。ちゃんとしようよ。
エヒメ　うん。え。そうだね。でも、マッサージだけにしたらいいんじゃない。そういうのは、やらなくてもいいんじゃないかな。
ヨシモト　でも、心臓マッサージと、そういうことはセットでしょ。ならわなかった。
エヒメ　どこで。
ヨシモト　車の教習所。
エヒメ　あー。教習所ね。

ヨシモト　いや。待って。落ち着け。落ち着け、私。
エヒメ　する？私。
ヨシモト　ちょっと待って。するなら、エヒメさんじゃないでしょ。私だよね。
エヒメ　そうだよね。
ヨシモト　でもなぁ。
エヒメ　あのね。ヨシモトさん。
ヨシモト　やる。やる。
エヒメ　でもさ。
ヨシモト　仕方ないなぁ。やるかぁ。
エヒメ　若干、うれしそうだよね。
ヨシモト　わかる。
エヒメ　早くすませようか。

ヨシモトは、タドコロのそばによる。

ヨシモト　あの。意識はありますか。誰か、誰か。救急車を呼んでください。
エヒメ　ヨシモトさん。
ヨシモト　たしか、こんな感じで最初は、周りに助けを求めるのね。言ってたの教官。教習所の人。
エヒメ　あ、そうだよね。
ヨシモト　まず、みぞおちから握り拳ひとつ上の部分を押すのね。
エヒメ　どこ。
ヨシモト　ここ。みぞおち。
エヒメ　だと思うよ。
ヨシモト　ごめんね。タドコロ君。（みぞおちを押す）
エヒメ　どう。
ヨシモト　柔らかい。

エヒメ　そうだね。
ヨシモト　（離れる）だめだ。
エヒメ　だめそう？
ヨシモト　いやいや。そうじゃなくて、私の気持ちの問題。
エヒメ　あの、以外と急がないとかもね。ずいぶん、心臓止まったままだし。
ヨシモト　わかるよ。わかるけどさ。そういうことと、私の気持ちの問題とさ。そういうのね。両方さ、ちゃんとしないとさ。
エヒメ　あのさ。
ヨシモト　こういうのって、乙女心。
エヒメ　わたし、やるわ。

エヒメが、タドコロに近づく。
それを止めるヨシモト。取っ組み合いになる。

ヨシモト　だからさ。ちょっと、冷静になって。
エヒメ　だって、本当にしんじゃったらまずいでしょ。
ヨシモト　ちゃんとするから。こっちも。
エヒメ　でもね。こうしてる間にもさ。本当にしんじゃうかもしれないでしょ。
ヨシモト　なにも言わないで。もう、大丈夫だから。今、私がやることは、ちゃんとわかってるから。
エヒメ　そう。大丈夫？
ヨシモト　本当に、大丈夫だから。

ヨシモト、近づく。

エヒメ　ん。
ヨシモト　みぞおち。

エヒメ　あれ。
ヨシモト　拳ひとつ上。
エヒメ　みて。ねぇ、みて。（中空を指さす）
ヨシモト　あ。
エヒメ　浮いてるね。
ヨシモト　浮いてる。タドコロ君。
エヒメ　浮くんだ。
ヨシモト　黒羊の臓物じゃなくて、黒ヤギの臓物だと、抜けるんだ。魂。
エヒメ　ちょっと、タドコロ君。動かないで。
ヨシモト　今、本体に戻してあげるから。
エヒメ　あ、あれ。
ヨシモト　え。なに。
エヒメ　虫取りアミ。
ヨシモト　あるある。

エヒメ　車の車庫じゃない。

二人、出て行ってしまう。

入れ違いに、店長とバンドマン入ってくる。

店長　だからですね。何度も言うように、手品じゃなくて、魔術なんですよ。僕らが提供するのはね。わかります？あー、なんか、だいぶ、いかがわしそうな目で。ほんと、疑ってますよね。ちゃんと、登録してますから。あのね、世界魔術振興会にも登録しているし。ライセンスありますから。結構きますから。お客さんも。あ、ちゃんと、セッティングは終わってますから。ゆっくりリハやってですね。のど乾きましたよね。あ、どうぞ。どうぞ（振る舞う）。あ、これ、うちの店で出してる。ドリンク。これがですね、すごく体にいいんですよ。だから、いろいろね。用途に合わせて、そう。いろい

ろ、できますから。いろんなね、科学療法では治せない心の傷とかね、そういうのを直す薬なんですよ。ちょっと、タドコロ君。タドコロ君。どしたの。疲れて、おねむかい。もう、頼むよ。仕事。仕事。

飲んでるうちに、バンドマンも次々に倒れていく。

店長　タドコロ君。ほら、みなさんリハーサルやるからさ。あれ、どしたんですか。あれ。あれ。

ヨシモトとエヒメ入ってくる。

二人とも中空を指さし。

エヒメ　あれ。増えてる。

ヨシモト　時間ないし、やりますか。

エヒメ　羊とヤギって、違う生き物なんだね。
ヨシモト　羊はめーめー。ヤギは？
エヒメ　さぁ。

二人、虫取りアミで魂を捕まえようとする。
暗転

バンドマンブリッジの音楽。

第二話「地獄変」

ブリッジからそのまま間奏曲、明かりが付く。

店長　ここは、カフェミツモト。都会から少し離れた場所にある隠れ家のような喫茶店。ここで働く、ごく普通の男女。でもただひとつ違っていたのは、ここの従業員たちは魔法使いの見習いだったのです。これから始まるお話は、カフェミツモト　自然処置療法研究室で起こるある日の出来事。それでは、第二話。「地獄変」

店内。

「カフェミツモト　自然処置療法研究室　開店一周年記念」という垂れ幕

バンドマンそれぞれ、リハが終わったら帰って行く。
すれ違いに男入ってくる。男、黙っていすに座る。
店長が入ってくる。

店長　（携帯電話）そうそう。はいはい。・・・はい。・・・ええ。そこまでは、あってますね。近くに温泉・・・はいはい、そうそう。そこまではあってます。ですからね、そこをまっすぐにきて、そのままでね。はい。はい・・・あってます。そこまで、きた。

タドコロ、手に皿などをたくさんもってやってくる。

店長　（タドコロに）吉川酒店、ビールサーバー。（携帯に）はいはい。そうそう。ですよね。ですよね。（タドコロに）やっぱり、ここわかんないっていうんだよね。行ってくるわ。

タドコロ　はい。
店長　（携帯に）いまいきますから、１５分くらい。
タドコロ　いきますか。僕。
店長　あぁ。
タドコロ　いいですよ。
店長　でも。あれ。（男を指さす）
タドコロ　いえ。
店長　え？
タドコロ　あの。
男　・・・
タドコロ　あのですね。
店長　えーと。
タドコロ　どうも。こんにちわ。
男　こんにちは。（今後、一切話さない）
店長　じゃあ、とりあえず行ってくるわ。

タドコロ　はい。
店長　セッティングとか、もうやっててていからさ。
タドコロ　何人くらいですか。夜。
店長　２５くらいかな。一応、ハガキ戻ってきてるのは。
タドコロ　はぁ。
店長　一次会はおれら入れて、３５くらいでいいんじゃないかな。たぶん。
タドコロ　はい。
店長　パーティー参加者だけじゃなくて、バンドの人もあれだね。４０つくっといてもらっていいかな。
タドコロ　はい。
店長　じゃ。
タドコロ　いってらっしゃい。

店長出て行く

タドコロと男

タドコロ　あの、お茶いかがですか。

男　・・・

タドコロ　あれですかね。あ。はじめまして。あの、タドコロっていいます。ここ、まだ、一年くらいなんですけど。今日のあれですよね。一周年のあれに。パーティーに。ですよね。あ、全然、気にしてもらわなくあれですから。お茶いれてきますね。

タドコロ、お茶を入れる。

タドコロ　とおくからですか。あれですよね。わかりずらかったですよね。ここ。迷うんです。みんな。どうぞ。お茶。

男、お茶を飲んでもいいし、飲まなくてもいい。
ヨシモトとエヒメが入ってく。たくさんいすを抱えてくる。

ヨシモト　もう少しいるね。
エヒメ　だね。
タドコロ　あと何個ですか。
ヨシモト　あ、いいの。いいの。（男を気にして）あれ。
タドコロ　お客さんです。夜の。
エヒメ　お疲れ様です。
ヨシモト　どうも。初めましてですよね。
タドコロ　あと、いくつですか。僕も運びますよ。
ヨシモト　私たちではこぶから。いいよ。
エヒメ　でもちょっと、男であったほうがいいかな。
ヨシモト　あの。いいから。いいから。

タドコロ　あの。さっきの薬のことなら。
ヨシモト　そういうことじゃないから。
タドコロ　ほんと、気にしないでください。（男の声）さっさと話しちゃお。
ヨシモト　いや、ほんと。大丈夫。大丈夫だから。
タドコロ　（男）さっさとさ、話しちゃおう。今日ね、結構急ぐんだよね。あれさ、だから、帰らなくちゃいけないのさ。ね。
ヨシモト　え。あ・・・あぁ。そう。そうなのね。
エヒメ　今晩、用事できたの。
タドコロ　（男）いやいや。別にさ。この人はかえんないけど。俺さ、帰るのさ。な。
ヨシモト　えっと。
エヒメ　タドコロ君。

タドコロ　あれ。僕。あれじゃないです。（男）いやいや、逆にさ。あれだよ。これ終わんないとさ、ツギの仕事いけないのさ。

ヨシモト　仕事。

エヒメ　今日、なんかあんだ。

タドコロ　ないです。（男）この人はさ、ないけど。俺はあるのさ。早くやっちゃおうって。ね。

エヒメ　え、なにをかな。

タドコロ　仕事さ。仕事。

ヨシモト　夜の宴会の準備。

タドコロ　じゃなくて。あの、僕、僕じゃない感じの人がしゃべってて。あのですね。僕じゃない人。（男）僕じゃないって。俺さ。俺だって。

ヨシモト　えーと。

エヒメ　なんか、また、悪い薬飲んだ？

タドコロ　自分からは飲まないです。勝手にですね。口がですね。（男）こういうのはじめてかい。あ、そっか。そっか。あれね。俺さ、今ね。ここにいるじゃない（男を指さす）

エヒメ　あの。

タドコロ　（男）でさ。しゃべれないのさ。この人。その辺から拾ってきた体だから。ね。

ヨシモト　はぁ。

タドコロ　だからさ。あれさ。この人の体借りてしゃべんなきゃなんないのさ。だからね、逆にね。ここにいるならさ。誰の体でもあれなのさ。いいのさ。

ヨシモト　（男）わかるしょ。だからさ。こっちの人の体でもはなせるのさ。

タドコロ　え、この人があれですか。今、ここですか。

ヨシモト　（男）そう。（ヨシモト）なに、これ。

エヒメ　え、え。よくわかんない。私、頭悪いから、よくわかんない。

タドコロ　え、だからさ。あれだってさ。（エヒメに）こっちのひとでもいいのさ。逆にさ。

エヒメ　ね。わかるしょ。こっちでもいいのさ。逆に。でもね。あっちこっちね。（エヒメ）私、どうなってるのかな。

ヨシモト　ってやってたらさ。

タドコロ　え。

ヨシモト　誰が誰だかわかんなくなるしょ。

タドコロ　はぁ。

エヒメ　あれ。

タドコロ　あぁ、だからさ。わかんなくなるしょ。逆にね。だから、こっちにさ、とりあえず、決めてしやべるから。だからさ、失敗したのさ。最初からさ、この人（男を指して）が

しゃべれればよかったのさ。でもさ、それがさ。だめだったのさ。

エヒメ　あの。

ヨシモト　なんだろこれ。

タドコロ　さっさと終わらせていいかい。

エヒメ　え。え。なにを。

ヨシモト　やらかした。やらかした。私、なんかやらかした？

タドコロ　でさ。だれさ。あれさ。俺、呼んだの。

ヨシモト　え。

エヒメ　え。

ヨシモト　呼んだ。

エヒメ　呼んだ。

タドコロ　呼んだ。一昨日。

エヒメ　えー。呼んだ。

ヨシモト　呼んでないよね。一昨日。

エヒメ　呼んだっけ。
ヨシモト　呼んだっけ。
タドコロ　よんだよ。あれさ。間違いないよ。あんたがた。アハハ。よんだよ。だからさ、あれさ。（タドコロ）何またによんだんですか。（男）あれだからさ。呼んだしょ。間違いないよ。呼んだよ。あんたと、あんた。そんな馬鹿な話ないしょ。だから、いるでしょ。俺さここに。
ヨシモト　えー。
エヒメ　ねぇ。
タドコロ　呼んだしょ。俺のこと。ほら、だからさ。エロエムエッサイム。エロエムエッサイムだか、なんだかってさ。あんたがたの作った呪文？みたいなのでさ。
エヒメ　あれ。
ヨシモト　え。あれ。
エヒメ　まじ。

ヨシモト　あれ。えー。まじ。
エヒメ　あれだ。ソロモンの鍵
タドコロ　「職人数名と聖なる預言者ソロモンの発見した水占術全体の小さな鍵」っていうのさ。（タドコロ）でなにやったんですか。今度は。
エヒメ　いや別にね。ちがうよね。
ヨシモト　ああね。違うの。違うの。私が誘ったの。エヒメさんは、私がかってに誘ったの。だから、エヒメさんは、悪くないの。
エヒメ　そうそう。ね。私は、誘われただけだから。
ヨシモト　また、裏切りかよ。
タドコロ　で、なにやったんですか。
エヒメ　いや別に。
ヨシモト　ちょっと、お願いしようと思って。呼んだの。
タドコロ　誰を。

ヨシモト　だれって。
エヒメ　ねぇ。
タドコロ　呼ばれたのさ。俺。ね。
ヨシモト　こんなに早くくるとおもわなかったからさ。
タドコロ　いやいや。早くしないとさ。仕事つっかえてんのさ。
エヒメ　ここの魔術マニュアルにもあるの。呼び出す方法。魔法陣書いたり、トカゲ集めたり、いろいろね。
ヨシモト　いや。わたしさ、あれよ。絶対失敗したと思ってたもん。こんなに簡単に悪魔とか呼び出せると思ってなかったもん。
エヒメ　意外と簡単に呼び出せるんだね。
タドコロ　悪魔。
ヨシモト　あ、そうそう。サタンね。
エヒメ　あのさ、サタンとデーモンってどうちがうのかね。
ヨシモト　どっちでもいいんじゃない。

タドコロ　で、なにさ。あれさ。ちやんと言ってもらっていいかな。悪いんだけどさ。ツギあるのさ。いかないとならないのさ。悪いんだけどね。
ヨシモト　はぁ。すみません。
タドコロ　でなに。何ほしいのさ。
ヨシモト　えー。
エヒメ　あのですね。
ヨシモト　いやいや。だめだめ。
エヒメ　あのですね。ここにいる。ヨシモトさんがですね。
ヨシモト　あ。だめだめ。エヒメさん。
エヒメ　なんで。
ヨシモト　だめでしょ。
エヒメ　なんで。だって、この。こちらのこの人、急いでるみたいだからさ。早くお願いした方がいいんじゃない。
ヨシモト　えー。だってさ。

タドコロ　なになに。え。なになに。はやく、してもらっていいかな。
エヒメ　だから。ヨシモトさん。はやく。
ヨシモト　で。だから、あの。ちょっと、こっちに（エヒメ）に移ってもらいっていいですか。
エヒメ　なんで。
タドコロ　え。別に、いいけど。
エヒメ　でなにさ。
タドコロ　なんで、悪魔の人なんて呼んだんですか。
エヒメ　仕方ないべさ。だって、こっちの人たち呼ぶからさ。こっちだって、仕事でしょ。仕事ならくるべさ。
タドコロ　そうですよね。すみません。
ヨシモト　あの。こっちきてください（エヒメ連れて行く）。
タドコロ　あのですね。何話してるんですか。
ヨシモト　ですから・・・（耳打ち）

エヒメ　あー。なるほど。なるほど。あれだわ。それなら、簡単だわ。
タドコロ　あの、
エヒメ　あー。わかった。わかった。
タドコロ　何お願いしたんですか。悪魔の人に。
ヨシモト　え。うん。別に。
タドコロ　えー。あの。ちゃんとしてくれないと。僕の体つかって勝手にそういうのやめてほしいんですけど。
ヨシモト　あ。悪魔の方、もう、こっちもどっていいですよ。
タドコロ　いいんだけどさ。あれだよね。それだと、ちゃんと、もらうもん、もらわねぇとまずいんだけど、いいかな。
ヨシモト　あ、はいはい。いくらくらい。
タドコロ　そんな、人間様のお金もらってもさ、あれでしょ。
エヒメ　まぁね、あれだよね。悪魔の人がさ、こっちのあれだよね、お金とかさ、そういうのもらってもね。

タドコロ　ね。そういうのもらってもさ。
ヨシモト　そちらの貨幣に換金とか。
タドコロ　そんなの簡単さ。あれだよ。
ヨシモト　簡単。
タドコロ　金じゃなくてさ。もらうのさ、あんた自身。
ヨシモト　うーん。
タドコロ　あんたの未来くれればさ。いや、未来って言うか。
あれさ、あんたの人生っていうか、将来っていうかさ、くれれば、いいよ。
ヨシモト　あ。
エヒメ　あ。
ヨシモト　それ。
エヒメ　でもさ、ヨシモトさんさ、タドコロ君と結婚するのにさ、今さ、これ契約したらさ。

タドコロ　あれ、なんか、いいました。結婚とか。僕とヨシモトさんと。それ、なんか、どういう。
ヨシモト　やめてくれる。エヒメさん。
エヒメ　まずくない。それだとさ。
ヨシモト　え。うん。うん。
エヒメ　あのですね。契約しますよね。今、ここでね。そしたら、願いかないますよね。
タドコロ　かなうわな。（タドコロ）それって、かなっちゃうんですか！
ヨシモト　かなうの。これって、悪魔と人との血の契約だから。普通、かなうの。
タドコロ　それ、なんか、おかしくないですか。
ヨシモト　おかしくないの。
エヒメ　かなうと、結婚できますよね。でも、魂もってかれるから、死にますよね。

ヨシモト　結婚とか。エヒメさん。
タドコロ　まぁ、死ぬわな。だいたい。
エヒメ　死なない人もいるんですか。
タドコロ　いやいや、死ぬ、死ぬ。みんな死ぬ。
エヒメ　そしたら。そしたらね。意味なくないですか。
タドコロ　なにが。
エヒメ　結婚しても、死んだら、意味ないですよね。
タドコロ　あ、そうか。そうか。なんも、いいよ。後払いで。
エヒメ　後払いでもだめでしょ。それなら意味ないよね。
タドコロ　でも、仕方ないでしょ（タドコロ）あの。勝手にそういう相談やめてくれます。
エヒメ　タドコロ君もきちんといれて話そうか。こういうのちゃんとしといた方がいいかもね。
タドコロ　そうですよ。（男）いや、いいよ。俺はさ、逆に言えばさ、なんも、ツギの仕事にも間に合えばいいからさ。

エヒメ　ちゃんとしとこうよ。ヨシモトさん。
ヨシモト　あ、うん。うん。
エヒメ　タドコロ君あのさ、ちょっとよく聞いてくれる。いまね、あれよ。だから、なによ。あれよ。だから、結構、正念場っていう感じなのよね。
タドコロ　え。よくわかんないんですけど。
エヒメ　いや、そうじゃなくて、今さ、結構、あれよ。あれあれ、正念場なわけよ。これさ、大切なわけよ。かかってるから。人の命とかさ。ね。
タドコロ　なんか、それって、僕自身の存在うすくないですか。
ヨシモト　ないない。全然、うすくない。
エヒメ　あれなの。君が、ヨシモトさんと結婚したくないとするよね。
ヨシモト　いきなり、そこの話。
エヒメ　そこの話。

タドコロ　それ、話的にあれですよね。ちょっと、おかしくないですか。
ヨシモト　だよね。
エヒメ　おかしくないよ。
ヨシモト　エヒメさん。
エヒメ　ヨシモトさんの話なのよ。これ、あれよ。もっと、しっかりしてよ。
ヨシモト　はい。
エヒメ　あれね。話をはじめに戻すけど。
ヨシモト　最初にね。
エヒメ　はじめに戻すけど。だから、タドコロ君が、ヨシモトさんと結婚したくないとするよね。大丈夫。大丈夫。仮定の話ね。
ヨシモト　仮定ね。

エヒメ　するとね。これね。あれだよね。タドコロ君がしないとすると、ヨシモトさんは結婚したいからさ。

ヨシモト　いいの、一緒にいるだけで。結婚が目的じゃないから。

エヒメ　いいの。そこはさ。しようよ。結婚。でもね、しないの。なぜかというと、タドコロ君が、したくないから。

タドコロ　はい。

エヒメ　すると、悲しいよね。ヨシモトさん。だから、売るよね。魂。悪魔の人にね。そしたら、結婚できるからさ。

タドコロ　それ、おかしくないですか。

エヒメ　ってことは、いい。いい。結果的にタドコロ君が、ヨシモトさんと結婚しないがために、ヨシモトさん、結婚したいがために、悪魔に命をあげてしんじゃうってことでしょ。死ぬってことでしょ。

タドコロ　えー。おかしい。おかしい。それぜったいおかしい。
（男に）ねぇ。（男が）よくわかんねぇ。
エヒメ　だから、あなたが、結婚してあげれば、ヨシモトさんは、悪魔に魂うって死ななくていいの。わかる。これは、事実でしょ。
タドコロ　えー。ちがう。違う。違うって。それ、おかしいでしょ。おかしいでしょ。
エヒメ　おかしくない。
タドコロ　おかしい。
ヨシモト　うーん。ちょっとおかしいかな。
タドコロ　ねぇ。そうでしょ。
エヒメ　私が、結構まじめにいってあげているよね。
ヨシモト　え。あ、ごめん。
タドコロ　あの。あのですね。

ヨシモト　あ、なになに。タドコロ君。今、しゃべってんのは、タドコロ君だよね。
タドコロ　あの、あれですから。
ヨシモト　なになに。
タドコロ　おかしいとおもうんですよね。
ヨシモト　え、なにが。
タドコロ　エヒメさんの理屈。
ヨシモト　まぁ、ちょっと、そういう面もあるかもね。それは、一面としてね。
タドコロ　僕、しませんから。結婚。
ヨシモト　えー。あー。そうだよね。
タドコロ　だって。
ヨシモト　あ、いいの、いいの。あのね、これね。冗談。これさ、冗談だから。もともとね。
タドコロ　いいです。ごまかさなくて。

ヨシモト　そんなわけないじゃない。私がさぁ、そんな悪魔呼び出して、タドコロ君と結婚しようなんて。

タドコロ　しませんから。僕があれなのは、、その、あれですから。エヒメさんですから。

間

ヨシモト　え。

タドコロ　そうですから。

ヨシモト　え。

エヒメ　ちょっと、やだ。

タドコロ　そうですから。

ヨシモト　そういうこと。

エヒメ　そういうんじゃないから。

ヨシモト　あぁ、そう。

タドコロ　そうです。だから、僕は、そういうことです。

間

ヨシモト　あ、わかった。だから、あれだよ。タドコロ君と私が、結婚して、そのかわりにエヒメさんの魂を持って行ってもらえばいいのよ。悪魔の人にね。

バンドのメンバーが入ってくる。
楽器を出して準備を始める。
男出て行ってしまう。

ヨシモト　（男に）あの、あの。あの！

バンド、一曲はじめる。

店長入ってくる。

店長　（携帯に）だから、いってますよね。そこじゃないって。そこのお店じゃなくて温泉、温泉です。もう、あれです。いきます。いきます。わかりました。（切る）あれじゃない。ぜんぜん、テーブルのセッティングできてないじゃない。ちょっと、もう、もう、お客さん来る時間だよ。ちょっと急がないとさ。あ、あのさ、きょうここにくる客のせたバスがさ。ほら、札幌からごそっとくるから、バス頼んだのさ。それがさ、また、迷っちゃって。また、迎えに行ってくるから。やっといてね、セッティング。向こうの部屋にあるからさ。皿とかフォークとかさ。じゃぁ、行ってくるから。ね。頼むね。

店長、行ってしまう。

三人、ぼーっとしているが、それぞれ動き出す。

流れ作業で椅子を運んでくる。
椅子を机の上に積み上げる。
音楽鳴り続ける。

―幕―

蘭越演劇実験室第四回公演上演台本

おしまいのことば

作・渡辺たけし

motif1　ある死亡記事

二〇一〇年十一月十六日　ＡＦＦ通信社の記事
題名　最後の話し手が死亡、消滅危機言語の一つが絶滅　北氷洋に浮かぶ島国の言語・ウガル語

北氷洋南西部に位置している島国ウガル国に暮らしていた、人類最古の文化の１つの末裔だと考えられている部族・ウガル族、その最後の１人が死亡したことが明らかになりました。
イギリス・ロンドンに本拠を置き、世界の部族のためのロビー活動を行っているサバイバル・インターナショナルが二〇一〇年十一月四日発表したところによると、ウガル語の最後の話し手、アラル・ロロアさんがその前の週、八十五歳前後で亡くなったということです。

ウガル語を話す人々は約六万五千年前から北氷洋のワラール島で暮らしていたとの説もあります。

この島が植民地されていた一八五八年の時点で、ウガル語派の言語を話すウガル族ら十部族の人口は五千人強でしたが、その多くが殺されたり、病気で亡くなったりしたため、ウガル語を話せる人間は、今回亡くなったアラル・ロロアさんひとりでした。

今回亡くなったウガル族のアラル・ロロアさんは二〇〇四年十二月の大津波も体験しています。そのことについてボアさんは、取材した言語学者に対し次のように語ったということです。

「地震が起きた時私たちは全員その場にいた。長老が私たちに『大地が裂けるかもしれないので、逃げたり動いたりするな』と言った」

motif2　星の消滅と言語の消滅

A　その日も僕たちは、軽自動車の中で星を眺めていました。僕の隣には、そう、彼女が座っていました。いつものように。そして、彼女はやはり、そう、いつものように煙草を加えていました。僕も煙草に火を付けました。煙を逃がそうと窓を開けました。車の中から、臭いが嫌だから、そうしたら、海風が吹き込んできました。そろそろ寒くなってきた時期だったから。

「北極星」

そういって、彼女は空を指さしたんです。たぶん、その辺が北だったし、その星っていうか、星ですよね。一番、大きく光っていたから。軽自動車はちょっと暗い感じだったので、彼女の顔はよく見えなかったんだけど。結構、みつけて、そう、喜んでいる感じでした。北極星。僕、それで言ったんで

す。そう、思い出したから、昔ちょっと聞いたことある話しだったので。こんな感じです。

「あのね。昔、ラジオで聞いたんだけど。北極星ってね、もうないんだよ。ホントに。北極星まで、何千光年も離れているでしょ。だから、光が届くまでね、何千年もかかるわけなんだよね。」

そうしたら、彼女、こういうわけです。言ったわけです。

「北極星ってさ、何千光年も離れてるの、それって、遠いかな」

だから、僕言いました。

「ラジオの人が言ってたんだよね。たしか、こんな感じ。『北極星は、地球から数千光年離れています。ですから、今私たちが見ている光は、数千年前にピカッと光った光なわけです。実は、北極星は、すでに星の寿命を向かえて消滅したと言われています。ですから、数千年前の光が、現在、地球に届い

ているわけですが、』って言うような感じで、だから『ですから、北極星は存在しないのに、数千年前に光った光だけが、今も地球に届いているのです』みたいな感じかな」
そしたらですね、彼女はいいます。っていうか、言いました。もしかしたら、あんまり興味のない話しだったのかもしれないけど。若干。
「なにそれ」
「え、あぁ、そう。あんまり、おもしろくない」
「いいや、面白くなくない。面白い」
「そう、どの辺が」
「北極星がすごく遠くにあるってことが」
って、言うんですね。彼女。そういう事じゃないんだけど。
「あのね、星が光ってるのに、当の本人の星がないないってことがね、もうないってことが面白いと思うんだけど」
「そうだね。面白いね」

彼女は、暗い軽自動車の中で、笑った気がしました。暗くて、見えなかったんですけど。よくは。その死亡記事を聞いたのは、ラジオで聞いたのは、その時でした。そんなような話しをしていた時でした。その、北氷洋で、言語が、最後に話す人が、亡くなったらしいって、どうやら。

B

海にいたんです。夜。暗い感じ。だいぶ。暗い感じ。彼と一緒に海を見てました。暗い。夜。海。そんな感じで。結構、暗いんです。すってました。煙草。そう、煙草。すってたんですね。そしたら、多分なんですけど、そうだと思ったんです。

「北極星」

って、指さしたんですね。結構、きれいだった。北極星。うんうん。彼が言った。

「あのね。昔、ラジオで聞いたんだけど。北極星ってね、もうないんだよ。ホントに。北極星まで、何千光年も離れているでしょ。だから、光が届くまでね、何千年もかかるわけなんだよね。」

面白いわけですよね。私としては。そういう話しって、嫌いじゃない。話し。だから、うんうんってきいてたんだけ、ど話し。光が届くまで、千年とか何千年とかかかる。ちょっと学校で理科の時間で聞いたことあるんだけど。だから、ちょっと知ってたんだけど。

「北極星ってさ、何千光年も離れてるの、それって、遠いかな」

って聞いた。すごく興味があったから。好きだから。そういう話し。うんうんって私、楽しくて、結構ウキウキで聞いてた。わりと。そしたら、彼話してくれたのね。

「ラジオの人が言ってたんだよね。たしか、こんな感じ。『北極星は、地球から数千光年離れています。ですから、今私たちが見ている光は、数千年前にピカッと光った光なわけです。実は、北極星は、すでに星の寿命を向かえて消滅したと言われています。ですから、数千年前の光が、現在、地球に届いているわけですが、』って言うような感じで、だから『ですから、北極星は存在しないのに、数千年前に光った光だけが、今も地球に届いているのです』みたいな感じかな」

私は、おもしろくて、話しの続きまって端だけど。彼、だまっちゃって。そういう感じで、黙ってるんです。で、

「え、あぁ、そう。あんまり、おもしろくない」

って聞かれたから。

「いいや、面白くなくない。面白い」

って、言ったんだけど、なんか、また、聞かれた。

「そう、どの辺が」

って、言ってくるから。あ、こいつ、私の言ってること、つまらないと思ってるなって思ったから、言ったですね。
「北極星がすごく遠くにあるってことが」
分かってたんだけど、言ったわけ。そしたら、彼、なんかいうわけ。つまらなそうに。
「あのね、星が光ってるのに、当の本人の星がないないってことがね、もうないってことが面白いと思うんだけど」
「そうだね。面白いね」
それ、本心。本心なんだけど。本当に面白いんだけど。うまく伝わってないなと思ったから、煙草、付けた。火、つけた。そして、窓をあけたら、風が入ってきた。海風。
その時ラジオからね。聞こえた。北氷洋。言葉。消滅した言葉。そう、それ。ロロアさん、ルルアさん？ロロアさん。ウガル族。ウガル語。私も、彼も真剣に聞いてた。その死んで

しまった言葉の話。そのラジオの音と一緒に聞こえてた。そう、聞こえてた、海の音。

C　北極星は、地球から数千光年離れています。ですから、今私たちが見ている光は、数千年前にピカッと光った光なわけです。実は、北極星は、すでに星の寿命を向かえて消滅したと言われています。ですから、数千年前の光が、現在、地球に届いているわけです。北極星は存在しないのに、数千年前に光った光だけが、今も地球に届いているのです。

間

ということが、今までの定説でしたが、現在は諸説いろいろあるようです。結局、天文学者達は、北極星の近くまで探索する宇宙船を出さない限りは、本当のことはわからないんだ

としています。結局、星のことは、星にしかわからない。次にお送りする曲は「星に願いを」です。

motif3　ノアの方舟

音　光　空気　壁　後悔　安堵　母　世界
父　兄　ベンチ　廊下　窓　夕暮れ　人　そして　また人
におい　ミルク　カーテン　時計　祖母　祖父　しわ　朝露
布　信号　靴　空　青　空　雲　空　太陽
帽子　ランドセル　噴水　写真　いす　机　すみれ　松ぼっくり
台風　自転車　雪　春一番　コンクリート　鉄棒　悲鳴　友達
友情　愛情　アイスクリーム　回転　雨粒　激しく動く僕の心臓
リボン　スカート　ピンク　後姿　髪の毛　指先　手の平　歌声
ポツ　ポツ　ポツ　ポツ　動き出す　メリーゴーランド
消しゴム　鉛筆　嘘つき　虹の橋　国語　理科　仏壇　紅葉
買い物　缶けり　綱引き　サッカー　焼肉　困惑　ツバメ　サイダー
革靴　シャンプー　歯磨き　裏切り　コーヒー　正直　六弦ギター
漫画　ロッカー　氾濫　騒乱　バッジ　クラップ　鈍感　鯖缶

花束　アメリカ　羊羹　地面の暖かさ
雪の積もる音を聞く 星の降る音を聞く 結末と君の体温を知る
港町 道路工事 今日の講義は休講 六時からのバイトに急ごう
満員電車　高圧電線　民間伝承　求人倍率
ロック　定規　ビール　ルール　コール　隣人　遠く　忘却
君の作るパスタ　踊り狂う白夜　色の落ちたタオル　熱に溶
けたカルタ
ぴんと張った背筋　そっと笑う羊　昨日と今日と明日の境目
ねぇ、わかっていますか。盲目の魔術師は鳩がだせないわけ
じゃないんだ。
可燃ごみ　不燃ごみ　ここを抜ける見込みなし
海ほおづき　風見鶏　ごみ収集の日を間違えてはいけません。
かためのパン　借りてきた猫　決別の朝　思い出せない化学式
軽自動車　煙草の煙　滑る海風　クリームソーダ
座る彼女　秋の終わり　空をさした　たぶん北を　光る星一つ

「北極星まで、何千光年も離れているでしょ。だから、光が届くまでね、何千年もかかるわけなんだよね。」
すると彼女　少し笑い　海の風も　少し笑う
記事　死亡　最後　話し手　消滅　危機　ウガル語　暮らし
人類　最古　文化　末裔　1人　ロンドン　世界　発表
今回　消滅　言語　人々　定説　植民地　病気　人間
食料　住居　政府　アルコール　依存　大津波　体験　学者
歌う　信じる　使う　開く　飾る　掘り起こす
だます　食べる　隠れる　笑う　飲む　振り向く
走る　投げる　伝える　かざす　見つめる　抱きしめる
歩く　叫ぶ　償う　愛する　立ち止まる　こらえる
息を吸う　息を吸い込む　深く息を吸い込む
虫の音　歌声　靴音　見つめ合う
沈黙　鈍色　ローソク　ここにいよう。
賛美歌　風向き　ここにいた　名残

ただ祈る　ただそこにいる　そして　もういない　ここにいた印
石の形　道の行き先　歩く影法師　揺れるがまの穂
たとえばつまり　この物語　ただ眠る夜　消えた言葉たち
冷たい空に響く、鐘ひとつ

motif4　手紙

D　この台本を書いた〇〇です。ここまで、今回書かせて頂いた台本を朗読劇という形でやらせてもらってきたんですけれどね。そうそう、先に役者を紹介させていただきますね。

（全員を紹介する）

今回のお話は、言葉が死んでしまうときの物語なんです。実際、世界には六千種類の言語があるといわれており、その内約半数の三千種類が、ここ百年間で消滅してしまうおそれがあるといわれています

（明かりを消して蝋燭をつける）

そして、お芝居はもう少しだけ続きます。この物語に出てくる北の海に浮かぶ小さな島の言語ウラル語なんですけれど。ウガル族のお婆さんがウガル語で最後にかいた手紙を読ませていただこうと思います。これは、ウガル族の最後の話し手

アラル・ロロアさんが、その一年前に亡くなった夫スンニさんに書いたお手紙です。それでは、いきます。

A　私の大切な人たちは
天に召されていった。
すこしずつ、少しずつ。
父、母、祖母、祖父、兄、姉
そして、たくさんの友。
大切なあなたも
昨日ついに、天に召された。
皆、清い心を持った人たち。
天の国でも幸せに暮らしている。
私の息子、娘、孫、そしてその孫。
私たちの言葉を話さない。
新しい言葉しか話さない。

この言葉は、もう誰にも届かない。
あなたと一緒に、
この言葉は天に召された。
歌う　信じる　使う　開く　飾る　掘り起こす
だます　食べる　隠れる　笑う　飲む　振り向く
走る　投げる　伝える　かざす　見つめる　抱きしめる
歩く　叫ぶ　償う　愛する　立ち止まる　こらえる
息を吸う　息を吸い込む　吸い込む　また　息を吸う
夜空を見上げると
輝く星
北極星
ずっと昔に長老が言った。
星の光は、星の記憶。
人の言葉は、人の記憶。
あなた、いままで　ありがとう。

ありがとう。
ありがとう。
さようなら。
ピリテ　エスラ　マテ　ツム　カムツ　プット　カリンテ
カルンタ　ソニマ　クト　ヒタシ　カニツ　コテナ
クンッマ　ソニ　ハトニ　マシニ　トノト　ソマナ
クツ　ス　ナマ　ナニツカ
マト　クート　ソン　カケト　トクタ　トナテ　シニタタ
ムニタ　クニタ　ユウオ　ワケトナ　マタボ　クンダ
ムパン　タナシ　チセゾ　クナユ　アナヂ　マンテカ
ムランカチ　クナニ　ンタニ　ムムン　ソンナ　ニマノタ
カニラ　ソンナ　マラジ　ヤアナタ　クラニヤ　トナン
サマニ
サマニ
マテーナ

全員 そして、すべての言葉は、歌なって天に召される。

―幕―

蘭越演劇実験室戯曲集
２００９～２０１１

２０１４年３月１日　第１刷発行
著　者　渡辺　豪
発行人　渡辺　豪
出　版　らんこし作家デビュー・プロジェクト

© Takeshi Watanabe 2014